

第1回 第3期鶴見・あいねっと策定検討会 議事要旨

日時：平成26年10月9日（木）午前10時～午前12時

場所：鶴見区役所6階8号会議室

出席者：【委員】

小山委員長、八森副委員長

大野委員、荻島委員、河西委員、烏田委員、川合委員、斉藤委員、島田委員
神保委員、杉浦委員、富樫委員、藤田委員、増子委員

【事務局】

区長、福祉保健センター長、福祉保健センター担当部長、福祉保健課長、
高齢、障害支援課長、こども家庭支援課長、保護課長、総務部長、地域力推進
担当課長、地域力推進担当係長、区社会福祉協議会事務局長、
区福祉保健課、区社会福祉協議会

1 開会

写真撮影の承認及び議事録のホームページへの掲載について確認

2 鶴見区長挨拶

3 策定検討会の設置趣旨について

事務局から説明。小山委員を委員長に、八森委員を副委員長に選出

4 議事（進行役：副委員長）

（1）第3期鶴見・あいねっと策定の進め方について

・事務局より説明。意見等なく承認

（2）区民アンケート調査の実施について

・事務局より説明

（3）話し合い～第2期鶴見・あいねっとを振り返って～

・事務局より第2期の活動や第2期開始時との統計数値の比較等を説明

意見交換

（進行役）

事務局から区計画、地区別計画の2期計画の主な取組について紹介があった。データでみえるものが、実感できる点と、実際に感じていることと異なる点があると思う。

①この4～5年間でよくなったこと

②引き続き課題であること

③新たな課題として感じることなどについて、考えを聞かせていただきたい。

（委員）

資料からも高齢者が増えていることがわかる。ボランティアの実数も増えているが、実際は地域の担い手は不足しているように感じる。

（進行役）

2期計画の3本柱について詳しく意見交換していきたい。1つ目の柱「つながりのあ

る地域づくり」について、新旧住民の関係づくりについてどうか？

(委員)

昔は住宅地域と工業地域であったが、最近工場が移転し、大型マンションができ、若い人が多く入ってきている。地元の人と馴染むのに時間がかかる。そのため、子どもとの関わりを深くするように働きかけている。地域の人と関わるのが面倒という人もいるが、子どもに親はついてくる。地域活動が煩わしい人と一緒にやることは難しいが、時間をかけて、若い人と一緒にやっていきたいと思っている。

(進行役)

「子ども」をキーワードに、継続的に若い人と取り組む、若い人を取り込むということかと思う。

(委員)

子ども会への入会を機に自治会に加入し、関係づくりができています。ある町会では、子どもが参加したもちつきの写真を、各自宅に配るとともに、親に青年部に入るよう勧誘している。子どもを通じた関係づくりは重要だと思う。

(委員)

資料から、乳幼児健診対象者数が増えているということであったが、子どもが増えているという実感がある。わっくんひろばでは、「孫育て講座」を実施している。地域の中で、孫育てをしていってもらえるよう進めていきたい。講座に参加された人には、子育て広場のボランティアになってもらっている。ふらっと一む関係者に、どのようなことに困っているかアンケートをしていく予定。ボランティアの年齢も若い人から高齢者まで様々。ふらっと一むの担い手は、高齢者が増えている。参加者は、このような居場所で地域の方に顔を覚えてもらうことが嬉しい様子である。

(進行役)

世代間のつながり、場づくりが増えてきているということかと思う。

(委員)

母親世代は、受け身の人が多い印象を受ける。もらうだけでなく、参加してもらう必要がある。お客様扱いしない方法を考えなくてはいけないと思う。100名ほどの0歳の母親たちがわっくんひろばで過ごしているが、力もある人たちであるため、担い手になれるのではないかと感じる。子どもがいるから参加できないと家にいる母親も多い。一時的に地域で子どもを預かり、参加してもらえるといい。

(進行役)

2~3割の方でも活動に参加していただければ、かなりの人数になる。

(委員)

現在子育てサポーターとして、月1~2回子どもを預かっている。若い人もそうだが、高齢者にも場を与えてあげられれば、活躍できるのではないかと。近所に公園をきれいにしている高齢者がいる。能力のある方が、いつからか始めた。見た人が「ありがとう」ということが、本人のプライドや生きがいになると思う。草取りをしている方の写真を撮って、本人に渡したら喜ばれた。「見ているよ」と伝えるとやりがいにつながる。声かけできる関係づくりや声かけながらひっぱり出すことが必要。

(進行役)

能力があり、やりたいという気持ちがあっても、知らないところで始めるのは難しい。声掛けをすれば来る人もいる。小さな種を上手に評価し、つなげる人がいれば、既存の活動が大きな起点になる。既存の活動をしっかり見つめることが重要。

(委員)

近所付き合いがなくても住める大型マンションに住んでいるのは、30代~40代が多い。老人クラブをまちづくりの核にし、60班の防災班を作り、大型マンションに回覧をしてもらった。10年前に町会に入ってもらいたいとお願いしたときは、あまり

参加はなかったが、防災訓練には40～50%の人が参加している。

仕事をリタイヤし、近所の付き合いが煩わしく、高級マンションですべてやってくれるような住みやすいところへ転居する高齢者も増えてきた。退職者にも、町の中で活躍してもらうことが必要。

「鶴見・あいねっと」の「高齢者」を75歳以上にしたい。65歳は、地域活動の主力になっている。「高齢者」という名前では元気よく働けないのではないか。ボランティアは、活動を増やせばその分増える。資料にあるボランティアの数は、ボランティアセンターに登録している人の数で、実際にはもっと多い。担い手が足りないと、ボランティアセンターに紹介してもらうが、90%以上は仲間うちで探している。

(進行役)

「高齢者」を65歳以上ではなく、もう少し年齢を引き上げようというご意見は、75歳位までは活発に活動をされる方が多く、「高齢者」という名前がなければより働きやすいのではないかということかと思う。

(委員)

連合地区であいねっとの会議を行っているが、単位町会から外れて、連合としてベクトルを合わせることが難しいと感じる。特徴の違う町会が、共通のテーマで話し合おうとすると、無難なテーマになってしまう。老人クラブも、地区によって異なる。共通のテーマでやろうとしても、一緒に活動することができない。

「老人クラブ」という名前を代えたほうが良いという意見もあるが、活動の中身を魅力あるものにすることに重点を置き、まずは自分たちの活動を知ってもらいたい。

(進行役)

老人クラブは、地域に根付いているというメリットがある。また地区単位を超えて実施する方法もある。地縁型とテーマ型の活動がつながる工夫も必要。

(委員)

老人クラブの活動回数は減っている。しかし、参加している人は参加している。65歳になったら老人クラブに入るように言ってもらえるとよい。区役所から高齢障害分野の話が出てくるが、地域には受け皿となる担当がない。自治会町内会では情報をどのように流しているのかと感じる。

(委員)

ある地区では、「ひざひざワックン体操」を月2回実施している。有事の際の避難場所の確認として、ウォーキングも行っている。距離が短いという声もあるが、多少足が悪くても有事の際に避難場所に行けるように行っている。また、認知症普及啓発として、人形を使った認知症講座を子育て支援の場で母親向けに実施した。

(委員)

身体障害者手帳所持者が増えているというデータがあるが、横浜市全域で高齢化と共に増加している。療育手帳については、特に軽度のB2の手帳所持者が増えている。親の高齢化によりケアマネジャーが訪問した際に顕在化することもある。皆さんの話を聞いて、保護する人を主体性のある担い手としてとらえることの重要性を感じた。力を発揮する可能性のある方たちだと思う。資料で、障がい者日中活動場所が、第2期策定開始時と現在とで1ヶ所しか増えていない。絶対数がまだまだ少ない。障がい者の親も高齢になっているため、支援が必要。3つ目の柱「互いに支えあう地域社会づくり」を推進していく上で、主体性を発揮していけるかが重要。

(進行役)

ラベリングされると、支えられる側になるが、支え手にもなれるという点は、先ほどの高齢者や子育て世代の話と共通する。支えられる対象者が、担い手になるためには、サポートが必要かもしれない。仕組みを作っていくと「支えあう」の意味も変わってくる。

(委員)

外国人を取り巻く環境について、鶴見区は、30人に一人が外国人、約9500人の外国人が住んでおり、横浜市で2番目に多い。外国人の子ども数は、18区中一番多い。学校でいじめにあっていたり、日本語は話せるが、授業にはついていけない子も多い。両親は働いているため、母語も話せず、母国にも帰れない。中学校卒業後が厳しい状況になっている。外国人と一緒に暮らしていこうという「鶴見の町は世界の町」になるとよい。このような子どもが多いことを知ってもらいたい。

(委員)

介護者も前期高齢者になってきている。先ほど子育て世代に、認知症講座を実施したという話があったが、認知症キャラバンメイトは、若い世代に有効であり、学校へ推薦してもらいたい。当事者が励みになるよう、町ですれちがった時にわかるよう、オレンジリボンのようなものがあるとよい。

(進行役)

他の人も見てくれていると頑張れる。子どもへのアプローチをしていけるとよいという話は、前半の話にもつながる。

(委員)

障がい者団体の運動会で、地域や企業の協力が増えてきた。障がいのある人が、社会で参加できる機会が少ない。行事があると喜んで参加する。ただ、知的障がいがある人の場合、どこまで見守ってもらえるかわからない。また障がいが軽いと地域に出ていくことも多く、トラブルになることもある。ボランティアをしながら理解を深めていきたい。障がい者の親も年をとってきたおり、イベントを実施しても片付けが大変になってきた。ボランティアを増やしていきたい。

(進行役)

他の人の手を借りながら、無理なく続けられるよう障がい児の親への支援も必要。

意見交換のまとめ(進行役より)

- ・「子ども」をキーワードにし、つながりの起点とする。子どもへの啓発が若い世代への啓発に繋がる。
- ・つながりづらかった人(大型マンション等)に対し、地域のニーズ(防災等)を切り口とする。
- ・高齢者に関して、75歳までは現役をテーマにしていく。
- ・介護者の会では、介護予防を実施し、予防的な視点をいれている。活動するために活動者自身の健康維持も大切
- ・65~75歳がボランティア活動に参加できる仕掛けや名称についての検討
- ・支えられる側ができることが増えていくことで、「支えられる」の意味が変わる。力が発揮できる環境を作っていくことが大切
- ・外国籍の子どもへのアプローチ
- ・障がい児の親への支援

(4) 第3期計画策定の方向性について

- ・事務局より説明

5 その他

- ・情報提供

ウォーキングポイント事業、認知症普及啓発講演会、子育て支援・地域力UP講座

- ・次回の予定

日時：12月3日(水) 15時~17時

場所：鶴見区役所 6階 10号会議室